

悪霊 第三部・五月の紅い空

悪
霊

第
三
部
・
五
月
の
紅
い
空

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
村野栄太郎……………党员。マルクス主義研究者
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
白瀬朱鷺……………女相場師。料亭「扇屋」の女将
鎌田悟……………党员。東京支部第四地区長
増田喬……………小百合の兄の後輩

昭和五年（一九三〇）年三月～五月。東京市、北海道H市

Ⅲ

「ちよっと、猪俣君」

二週間が過ぎ、三月も終わりに近づく頃、新時代社に本社した佐和子を、村野の家に同行した編集部員が呼び止めた。

「村野先生から電報が届いた。明日、原稿を取りにきてほしいそうだ。すまないが君、行つてくれないか」

「わたくしがですか？」

「先生が、そうお望みなんだよ」

編集部員は声をひそめた。君のことを気に入ったようだ。先生は売れっ子だし、またぜひ、執筆をお願いしたい。だから君、気を配って、さらに気に入られるように、励みたまえ。

その物言いに、かすかな嫌悪感が湧いたが、「承知いたしました」と頭を下げ、翌日、佐和子は村野から預かった原稿を風呂敷に包んで江ノ電に乗った。

「やあ、どうも」

村野栄太郎は、相変わらず農家の離れで布団に入ったまま、腹這いになって原稿を書いている最中だった。

部屋に入ると、村野は身を起こし、文机の上に重ねてある原稿用紙の束を手渡した。拝見します、と原稿用紙に目を落とすと、君、と村野が鋭く咎めた。

ぼくは、書き上がったばかりの原稿を目の前で読まれることには耐えられない。持ち帰って読んでから、手紙で感想を寄越しなさい、それが礼儀だ、とまくしたてた。

あまりの激高ぶりに、ひたすら恐縮するしかなかった。身を縮め、もうしわけございませんでした、と小さな声で繰り返していると、村野は、どこか安心したかのように表情を緩め、そんなことより……と切り出した。

「先日、君に渡した原稿、読んでくれたかね」

「あ……はい」

打って変わって柔らかな口振りに安堵しつつ、風呂敷包みを開いて原稿用紙を差し出した。

「ありがとうございます」

「どうだったね？」

村野は、覗き込むように顔を突きだして訊ねた。

「君の率直な感想を聞かせてくれたまえ」

「ええ……そうですね……」

瞬きもせずに見つめる村野に、佐和子は身をすくませながら必死に言葉を探した。

「あの……ソビエト同盟で男女の差別がなくなつたと書いていらつしやいますね」

「うむ」

「とても素晴らしいことだと存じます」

「そこが、いちばん感銘したのかね？」

「はい」

深くうなづく村野に、佐和子はい、言葉を弾ませた。

「早く、日本もそうなつてほしいと願う婦人読者は多いのではないでしょうか」

「君も、そう願うかね？」

「それは……わたくしも、女性ですから」

「ぼくは……」

村野は、唇を尖らせて言った。

「婦人運動家は大嫌いだ」

平塚らいてう、奥むめお、市川房枝といった著名な婦人運動家の名前を、村野は口にした。

「新しい女、などと持ち上げられているが、しょせんはブルジョワのお嬢様が、男を真似て突飛なことをやらかして、世間の耳目を集めていい気になっているだけだ。とうてい、新しい時代を切り開く力にはなれんよ」

ブルジョワのお嬢様方という言葉が、棘トゲのように刺さってきた。面差しを曇らせる佐和子に気づいてか気づかなくてか、村野は取り憑かれたように言い募った。

「その証拠にあいつらは、社会主義とか革命という言葉を持ち出すと、すぐにおじけついて、反動的なことを言い出す。自分たちが、革命が起きたら打倒されるべきブルジョワジイの側にいるからだろう。階級の特権を捨てて、反政府活動に身を捧げる覚悟すらない。だが、君もぼくの原稿を読んだならわかるだろう？ 社会主義革命の成就なくして、真の意味での女性の解放はありえないんだってことが……」

「でも、先生」

長広舌を振るって婦人運動家批判をまくしたてる村野に、つい、佐和子は口を挟んだ。村野の口ぶりに、どこか女性蔑視的な雰囲気を感じたのだ。

「たとえ、階級の特権を捨てて反政府活動に身を捧げても、女には、せいぜいハウスキーパーくらいしかやらせてもらえないのでしょうか？」

村野が口を噤んだ。

いけない……。佐和子は悔やんだ。村野は、社会主義の研究者であって、活動家ではない。非合法活動における「女性」の役割を知っていると、軽々しく口にしてはいけないはずだ。

だが、村野の反応は意外だった。

「女から、そんなふうに見られているとしたら、反省しなくてはいけないな……」

村野自身が「非合法活動」、あるいは「党」の側にいるかのような口ぶりだった。

「貴重な意見だ……。よく言ってくれた」

軽く頭を下げると、失敬するよ、と腹ばいになり、枕元に広げた原稿用紙に向かった。

佐和子は、数日後に校正刷りが出ますので郵送いたします、と告げ、立ち上がった。すると村野は、首を曲げて佐和子を見上げた。

「郵送じゃなくて、君が持ってきたさい」

か細い声だったが、高圧的な響きがあった。佐和子は、承知いたしました、と答えるしかなかった。

「ほう、村野先生が、校正刷りを君に持って来てほしいって？」

新時代社に戻り、編集部に報告すると、してやったりという表情を浮かべた。

「編集長とも話したのだが、ここはひとつ、正式に村野先生の担当になってもらうよ」

狭い編集室に詰めていた三人が、佐和子に拍手を送った。佐和子は頭を下げ、ありがとうございませ、と幾度もお辞儀をした。

雑用係ではなく、正式な編集部員として認められることになり、給料も上がった。貴代美ちゃんに報告しなくっちゃ。久しぶりに、胸をときめかせながら、家路を急いだ。回り道をして銀座の明治屋で高価な葡萄酒や舶来の食べ物を買込んだ。

今夜も貴代美は遅いだろう。でも仕方ない。どんなに遅くなくても、帰ってくるまでは起きて待つていよう。そして、ふたりで祝杯をあげよう。

意外なことに、アパートの窓には灯りがついていていた。今日は早かったんだ。自然と笑みがこぼれた。佐和子は、足早に階段を駆け上がった。

「ただいま！」

明治屋の紙袋を抱えてドアを開けると、貴代美がテーブルに頬杖をつき、ぼんやりと壁を見つめていた。

「あ、おかえり」

すぐに笑みを浮かべた貴代美の目の前に、佐和子はどんと紙袋を置き、今日はごちそうよ、葡萄酒に、チーズに、ハム。オイルサーゼンもあるわ。

「なんか、いいことでもあったのかエ？」

眼を丸くした貴代美だったが、佐和子の説明に、両手をあげて万歳三唱した。

「よかったじゃないか！」

長い腕を伸ばして佐和子を抱きしめ、幾度も幾度も頬に唇をあてた。

「おめでとうね。お祝いしようね」

葡萄酒の栓が抜かれ、乱雑に広げたハムやチーズを頬張りながら、ひとしきり、たわいもないお喋りが繰り広げられた。お腹もふくれ、酔いも回り、二人は仰向けに並んでベッドに倒れた。

そのまま、しばし静かな沈黙が続いた。

「おさわちゃん……」

貴代美が口を開いた。

「なあに？」

佐和子は、からだをずらして、貴代美の胸に顔を埋めた。その肩を撫でながら、貴代美は言った。

「あたい、明日から……当分、帰れない」

「忙しいのね……組合が」

貴代美の柔らかな乳房の感触を味わいながら、佐和子は言った。

「ううん、そうじゃないんだ」

貴代美は、重たげな口振りで言った。

「住む場所を変えろって……小沼さんに言われた」

「小沼さん？」

佐和子は身を起こした。

「なぜ……小沼さんがそんなことをおっしゃったの？」

「ごめん」

覗き込む佐和子の眼差しを避けるように、貴代美は顔をそむけた。

「言えないんだ……ほんとうは、引越さなきゃいけないことも喋っちゃいけないって、そう言われたんだ。おさわちゃんにも黙って、アパートを出ろって……」

だからって……。追求しようとして、佐和子は口を噤んだ。

貴代美の眼から、糸を引くように、涙が滴りおちていた。

今まで住んでいたアパートを出るということは、貴代美が何か重大な「任務」を背負わされたのであろうことは、察しがついた。佐和子は、「非合法活動」に従事しているわけではない。しかし、完全な部外者でもない。貴代美から引き離しておくのが得策と考えたのか。

また、のけものにされた……。

貴代美と別れる辛さよりも、疎外感からくる憎しみが募った。

「……それで」

佐和子は噎れた声で訊ねた。

「貴代美ちゃん、何時まで引越しているの？ いずれは帰ってくるの？」

「わかんない……」

貴代美は身を起こし、ベッドの傍らに置いてあるチリ紙をとって鼻をかんだ。

「ずっと帰れないかもしれない……」

「このアパートはどうするの？」

「おさわちゃんに任せればいいって……」
佐和子は、ベッドから飛び降りた。バッグからブラシを取り出し、鏡の前で髪の毛を整えはじめた。

「今から出かけるの？」

驚いて訊ねる貴代美に、佐和子は答えた。

「淡路町に行くわ」

「淡路町？」

貴代美もベッドから降りて、佐和子のそばに駆け寄った。

「まさか……小沼さんのところ？」

「そうよ」

「行って、どうするんだよ！」

「訊くの」

「何を？」

「貴代美ちゃんに、何をさせるおつもりなのか、訊くの！」

「だめだよ！」

貴代美は、佐和子に抱きついた。

「お願い、それだけはやめて！」

「だったら、わたくしも、貴代美ちゃんと一緒に活動できるよう、頼んでみる」

「そんな……無理だよ……それに、あたいが喋っちゃったことがばれたら、あたいが困るんだよ。」

ねエ、お願いだよ」

「わかったわ……」

必死の懇願に、佐和子も折れた。

「ごめんよ……。啜り泣く貴代美を見やりながら、佐和子は心を決めた。

わたくしは、わたくしなりに、やり方を見つけます。そう小沼に告げた言葉が脳裡に蘇ってきた。今こそ、実行に移す時だ、と。

翌朝、目を覚ますと、貴代美の姿はなかった。

風の強い日だった。

鶴沼に江ノ電が開通して駅が出来たのは一年前。まだまだ寂しい駅前ではあったが、商店街らしきものが形づくられつつあった。

駅前通りを抜け、防砂林が並ぶ海岸に出る。浜から飛来する細かな砂が、髪の毛や着物に付着し、白い粉模様となった。

黒っぽいツーピース姿の佐和子に向かっていたのは、海岸ぞいに店を開いている小料理屋であった。村野栄太郎が、たまには御馳走しよう、と座敷を取ってくれたという。

小料理屋の玄関に立ち、砂を払って暖簾をくぐり、出迎えた仲居に村野の名を告げると、二階に案内してくれた。階段をあがった左右に一部屋ずつ座敷がある。それぞれに小さな玄関がついていて、沓を脱いで上がるのだ。

着流し姿の村野はすでに席についていた。部屋の隅に松葉杖が置かれている。ま、あがんなさ

い、とお辞儀をする佐和子を向かいに座らせた。

村野の目の前に、銚子と猪口が置いてある。すでに、酒杯を傾けていたらしく、顔が赤い。

「原稿料が入ったのでね。祝杯と……それに、君には幾度も遠くまで来てもらったから、そのお礼だ」

杯洗で猪口を洗い、差し出した。両手で受け取ると、酒を注ぎ、呑め、と促す。酒席に慣れない佐和子とはまどったが、いただきます、と呑み干した。顔が火照った。

「君は、いける口かね？」

「いえ……、ほんの少し」

貴代美のアパートに同居してお酒につきあうようになって以来、佐和子はかなり強くなっていたが、それを口にするのは憚られた。

「じゃあ、君のぶんのお銚子も頼もう。後は手酌でね」

仲居を呼んで、酒と料理を運ばせた。刺身に酔の物、サザエの壺焼きなどが卓に並んだ。

村野は、ぼそぼそと小さな声で喋りながら、目の前の料理には箸をつけず、ひとり酒杯を重ねた。村野が箸をつけぬ手前、佐和子が食べるわけにもいかず、姿勢を崩さないまま、相づちを打つしかなかった。話のほとんどは、著名な「左傾」作家や評論家への悪口だった。『新時代』に掲載された論文までも批判しはじめた。

「だいたいね、彼の認識は甘い。日本の絶対主義勢力は、ヨーロッパのような大土地所有制に支えられていないから、統一された勢力になってないなんて……甘すぎる。奴ら支配階級が、明治維新以来、帝国主義的野望を果たすために、どれだけぐるになって貧農から搾取してきたか、て

んで理解していないんだ。何より、絶対主義的勢力が統一されていないから、プロレタリアートとの階級闘争は、ロシアやドイツのような形では起こらないとまで抜かす……冗談じゃない……そういう物言いが、いかに敵に塩を送る行為か、まるで分かっていやしない……」

しだいに呂律も回らなくなっていた。酒を飲み干す度に、ひどくせき込む。眼を据えて論敵を罵る様は、酒の力を借りているせいもあり、ひどく卑しげに見えた。

校正刷りを届けることは別の「目的」がなかったら、一刻も早く退席したかった。だが、佐和子は耐えた。最初は、酒癖の悪い男と部屋に二人きりという状況が恐ろしかったが、しだいに心が落ち着いてきた。舌鋒鋭い論客という高い評価を受けている目の前の男は、酒の力を借りねば大きなことも言えぬ焼き餅焼きの本性を現している。

むしろ、今が好機ではないか。

「先生」

佐和子は、お銚子をもって立ち上がり、村野の隣に座った。まるで芸者のよう……と恥じ入る隙もないほど、自然にからだが動いていた。

「わたくしも、先生のおっしゃるとおりだと存じます」

「ほお……」

村野は薄笑いを浮かべ、顎を突き出して佐和子の酌を受けた。

「君に、分かるのかね？」

「ええ」

佐和子は、村野のお銚子を取り上げ、自分の杯に注ぎ、呑み干した。

「なにごとも……実行の伴わぬ言論は、無意味だと存じます。大事なことは、敵勢力の分析なんかではなく、いかにたたかうべきか、です」

村野はじつと佐和子を見つめた。佐和子は、気づかぬふりをして、さらに酒杯をあおった。

「君は……」

村野は声をひそめた。

「ひよつとして、黨員なのかね？」

「いいえ」

佐和子のはつきりと答えた。

「前にも申し上げましたとおり、ハウススキーパークらしいしか役目を与えられないのなら、そんなもの、なりたくはございません」

「君は、分かってない」

村野は声を荒げた。

「いいかね。こういう運動で絶対に禁物なのは、私情だ。目的の達成のためには、家族とも縁を切らねばならんし、友人を捨てる覚悟も必要だ。そして、与えられた任務は、疑うことなく黙々とこなす。そういう人間でなければ……」

「先生はやはり……」

佐和子は口を挟んだ。

「黨員でいらつしやるのね」

二階にある二つの座敷のうち、一つは空席だった。階下からは、ちょうど昼餉時ひるげとあって、談笑する客や、注文を受け答える仲居の賑やかな声が聞こえてくる。

村野は、手にした猪口を卓に置き、じつと佐和子を見つめ、やがて口を開いた。

「ぼくが黨員だしたら、どうするね、君は？」

探るような目つきで、村野は続けた。

「警察に通報するのかね？」

「いいえ」

瞬きもせず、佐和子は答えた。

「先生のお力で、わたくしを党に入れていただきたいのです」

「しかし君は……ハウススキーパークでは嫌だと……」

「はい。しかし、先生の推薦があれば、もっと重要な役目をいただけるのではないかと、そう期待しております」

「そんな甘いもんじゃないよ、君」

村野は、猪口ではなく銚子からじかに酒を呑み、からだを折って噎ひせた。咳き込みがひどい。佐和子は狼狽うろたえた。仲居を呼ぶべきか、迷った。仲居が来た時点で、密談は不可能になり、当初の目的は果たせなくなる。仕方なく背中をさすっていると、やがて村野は落ち着きを取り戻した。

「すまんね、君」

ぼつりと言って、また銚子に手を伸ばす。佐和子は思わず、その銚子を取り上げた。

「いけません、先生」

「なに？」

なおも伸ばそうとする手を、佐和子は掴んだ。

「大切なおからだです。無茶をなすってはいけません」

村野は、佐和子の顔と、自分の手を掴んでいる彼女の手の甲を見比べた。はっとして手を離した。村野はなおも、佐和子を凝視し続け、やがて口を開いた。

「ぼくのからだを、気遣ってくれるのかね？」

その眼が、潤みかけていた。おんなを見るおとこの眼差しだった。佐和子はたじろいだ。

村野は、ゆっくりと顔を近づけてきた。酒臭い息が、佐和子の鼻孔をつんと突く。

「なあ、君……」

思わず身を反らした佐和子に、村野はのしかかるように言った。

「さっきの話、考えてもいい……」

「……と申しますと？」

「君を重要な役目につけるよう、口添えしてもいいよ」

唇が醜く歪んだ。その唇を動かさず、村野は続けた。

「そのかわり……何というか、見返りがほしい」

「見返り？」

すぐにも立ち上がり逃げ出したい思いを佐和子は堪えて、訊ねた。

「つまりだ」

村野が、佐和子の手を掴んだ。

「君がもし……ぼくのところに来てくれるならば……」

反射的にからだは動いた。

村野は全身を強張らせ、喉の奥で小さく叫んだ。

佐和子の右手が村野の股間に伸び、睾丸を捻り上げていた。

しまった……！！

村野は俯せに倒れ、股間を両手で押さえ、白眼を剥き、尻を突きだしたぶざまな格好で悶絶していた。苦しげに歪んだ唇が開き、吐瀉物が迸った。

おしまいだ……。

佐和子は座敷を飛び出し、夢中で階段を駆け下りていた。

雑誌社は臙首されるだろう。重量な役目で「党」に入りたいという願いも、潰えた。

すべてを失ったのだ……。こぼれる涙を拭いながら、佐和子は鶴沼の海岸を、ひたすら走った。